

この世界を信仰すること——フッサールの理性批判の射程——

吉川 孝（高知県立大学）

フッサールとハイデガーは、「世界」をめぐる緊張関係にある。フッサールは「現象学的還元」による「世界無化」によって、超越論的主観性による世界の意味構成を主題にする。これに対してハイデガーは、「世界内存在」としての「現存在」の存在を主題にする。世界を「無化」するフッサールと「世界の世界性」に向き合うハイデガーという対立図式が描きだされる。しかしフッサールは、世界から眼を背けて意識の内在に閉じこもる哲学者ではない。フッサール現象学の根本概念である「志向性」は、世界への通路であり、世界へと開かれている。しかも重要なのは、ハイデガー自身がそのことを熟知しており、志向性のうちに新たな哲学の可能性を読み取ることである。『論理学研究』の「カテゴリー直観」のうちに「存在」への通路を見いだしたのは、ほかならぬハイデガーであった。

ハイデガーによる批判の矛先は、むしろフッサールの志向性概念の「主知主義」に向けられる。認識の確実性の探求というデカルト的モチーフは、発見した志向性を意識の内在の領域に閉じ込めてしまう。こうした批判に対して、フッサールの読み手から多くの反論がなされている。フッサールは、認識の哲学者としてよりも、生の哲学者として評価されるべきである。時間、身体、他者などのトピックは、生の哲学者フッサールの中心問題であり、後期の生活世界論は、それらの問題系が収斂する地点となる。フッサールの後期思想がハイデガーへの応答として解釈されることもある。

しかしながら、今日の研究成果を踏まえるならば、こうした批判とそれに反論する双方がともに、主知主義をめぐる論点を見誤っていることが明らかになる。というのも、フッサールは「実践理性の批判」に基づく現象学的倫理学の確立という問題設定に導かれて、みずからの現象学的哲学の主知主義を批判し、修正するからである。フッサールは1920年代の初頭に、倫理学の問いを排除した『論理学研究』からも、論理学をモデルとして客観主義的倫理学を構想した『イデーニ I』からも離反して、実践理性の学問としての現象学的倫理学を打ち立てた。このような理性論に導かれたフッサール哲学は、世界をめぐる思考にどのような帰結をもたらすのか。重要なのは、フッサールの世界論を、生へ

の帰還ではなく、あくまでも理性批判の展開という観点から検討し、その独自の意義を明らかにすることである。

『イデーニ I』で、世界は「カント的意味での『理念』」と見なされる。感性的知覚が原理的に対象を一面的にしか与えないのであれば、感性を通じて経験されるこの実在的世界は、けっして全面的には与えられない「理念」にとどまる。このような「理論理性の批判」の成果こそまさに、ハイデガーの世界論と対比すべきものである。フッサールにとって経験世界は、自然的態度の日常性においても、原理的に近づきえないものであり、「慣れ親しみ」の次元には位置づけられない。ハイデガーにおける「有意義性」「世界の世界性」は、周囲世界（Umwelt）を特徴づけるものかもしれないが、世界そのものの性格とは言いがたい。

世界が認識されえないならば、「認識」とは別の意識の様式が世界への通路となる。フッサールの「実践理性の批判」は、認識されることのない世界が「信仰」されるべきものであることを指摘する。われわれの実践（日常生活における行為から科学の認識の営みまでをも含めて）が有意味であるためには、世界が存在すると考えられるのでなければならない。世界の存在は理論的に認識されるわけではなく、われわれの実践が合理的であるために実践的に要請されるものである。

このような論点は、カントの理性批判を辿り直すように見えながら、独自の射程をもっている。1. ここでの世界は、徹頭徹尾、「現象」の水準に位置づけられる。フッサールによれば、フェノメナとしての世界が認識によっては接近できないのである。あくまでもこの世界を日常的に生きるということが、そのことにおいて、理論的には不可解なものを信仰することで成り立っている。2. このような信仰は、みずからの生を試すという倫理的含意をもっている。この世界を信仰することは、世界の存在の蓋然性を過大に見積もり、蓋然的でしかないものを確実であるかのように見なすことである。そのときには、不確かなものを前提としてみずからの生を方向づけるという意味において、失敗するかもしれない試みに生を賭けることになる。フッサールが「倫理的生は『刷新（Erneuerung）』の生である」（『改造』論文）と述べるとき、失敗や幻滅に開かれた「試し」のなかに生きることの実践的合理性を主張している。こうした点に、フッサールの理性論の到達点と独自性があるように思われる。